

令和3年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第4号（8月予報）

令和3年7月30日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <table> <tr> <td>秋田県病害虫防除所</td> <td>018-881-3660</td> </tr> <tr> <td>秋田県農業試験場</td> <td>018-881-3326</td> </tr> <tr> <td>秋田県果樹試験場</td> <td>0182-25-4224</td> </tr> <tr> <td>かづの果樹センター</td> <td>0186-25-3231</td> </tr> <tr> <td>天王分場班</td> <td>018-878-2251</td> </tr> </table>	秋田県病害虫防除所	018-881-3660	秋田県農業試験場	018-881-3326	秋田県果樹試験場	0182-25-4224	かづの果樹センター	0186-25-3231	天王分場班	018-878-2251
秋田県病害虫防除所	018-881-3660										
秋田県農業試験場	018-881-3326										
秋田県果樹試験場	0182-25-4224										
かづの果樹センター	0186-25-3231										
天王分場班	018-878-2251										
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は8月を主とします。次回の発表は令和3年8月31日の予定です。</p> <p>◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</p> <p>◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のホームページで確認してください。https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</p> <p>◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/</p> <p>◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/</p>											

I. 予報の要点

水 稲	<p>斑点米カメムシ類の発生量は多いと予想されます。高温多照の影響で出穂が早まっているので、出穂期的確な把握に努め、出穂期10日後頃の茎葉散布剤による防除と、散布当日から7日後までの畦畔や農道の草刈りを実施してください。</p> <p>穂いもちの発生量はやや多いと予想されます。ほ場によって葉いもちの発病程度は大きく異なりますので、水田内に入って葉いもちの発病状況をよく観察し、病斑が見られるほ場では直ちに防除を実施してください。</p>
大 豆	<p>紫斑病の発生量は多いと予想されます。前年収穫された子実から、QoI剤（アゾキシストロビン）の耐性菌が確認され、県内に広く分布していると考えられますので、薬剤の選択に注意してください。</p>
野 菜	<p>病害では、ねぎ（秋冬どり）の黒斑病・葉枯病、きゅうりの褐斑病の発生量がやや多いと予想されます。降雨が続く場合や病勢の進展が著しい場合は、薬剤の散布間隔を短くしてください。</p> <p>害虫では、ねぎ（夏どり）のアザミウマ類、きゅうりのワタヘリクロノメイガ、トマトのヒラズハナアザミウマの発生量が多いと予想されます。抵抗性の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しないでください。</p>
果 樹	<p>ナミハダニの発生がりんごでやや多い、なしで多いと予想されます。ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点在同一の剤は年1回までの使用としてください。</p> <p>ぶどうでは、べと病がやや多いと予想されます。袋かけ以降の散布薬剤はボルドー剤などを散布してください。</p> <p>各品目の薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮してください。</p>

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	穂いもち	全県	やや早い	—	やや多い
	紋枯病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	ニカメイガ (2回発生地帯の第2世代)	全県	—	多い	多い
	斑点米カメムシ類(第2世代成虫) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県	やや早い やや早い	多い 多い	多い 多い
大 豆	紫斑病(子実)	全県	やや早い	—	多い
	アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	全県	やや早い やや早い	多い 平年並	平年並 やや多い
	吸実性カメムシ類(ホソヘリカメムシ)	全県	—	多い	多い
	ウコンノメイガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	フタスジヒメハムシ	全県	—	—	平年並
	マメシンクイガ	全県	平年並	—	やや多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	平年並	やや多い
	食用性鱗翅目幼虫	全県	—	やや少ない	平年並
ねぎ (夏どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	平年並
	アザミウマ類(ネギアザミウマ)	全県	—	やや多い	多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	少ない	やや少ない
ねぎ (秋冬どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	平年並	やや多い
	アザミウマ類(ネギアザミウマ)	全県	—	やや少ない	平年並
	ネギハモグリバエ	全県	—	少ない	やや少ない
きゅうり	べと病	全県	—	平年並	平年並
	うどんこ病	全県	—	平年並	平年並
	褐斑病	全県	—	やや多い	やや多い
	斑点細菌病	全県	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	アブラムシ類(ワタアブラムシ)	全県	—	少ない	平年並
	ワタヘリクロノメイガ	全県	—	やや多い	多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
トマト	灰色かび病	全県	—	平年並	やや少ない
	葉かび病	全県	—	平年並	平年並
	ヒラズハナアザミウマ	全県	—	平年並	多い
	オオタバコガ	全県	—	平年並	平年並
えだまめ	べと病	全県	—	平年並	平年並
	ツメクサガ	全県	—	やや少ない	平年並
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	平年並	やや多い
りんご	斑点落葉病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	黒星病	全県	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	平年並	平年並	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	多い	やや多い
	シンクイムシ類(モモシンクイガ)	全県	—	平年並	平年並
	ナミハダニ	全県	—	平年並	やや多い
	リンゴハダニ	全県	—	多い	やや多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	全県	—	多い	やや多い
	キンモンホソガ(第4世代)	全県	早い	平年並	やや多い
なし	黒星病	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	黒斑病	県北部・県中央部	—	少ない	少ない
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	平年並
	シンクイムシ類(モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	やや多い	多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	多い	多い
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	やや多い
	灰色かび病	県南部	—	やや少ない	やや少ない
	晩腐病	県南部	やや早い	平年並	平年並
	チャノキイロアザミウマ	県南部	—	平年並	やや多い

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 穂いもち	やや早い（前年並）	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量及び日照時間はほぼ前年並と予報されている（ /±）。

イ、高温多照の影響で出穂が早く進んでいる（ - / ）。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における葉いもちの発病株率は5.0%（前年3.2%）、発病地点率は25.0%（前年16.9%）でいずれもやや高かった。上位2葉の葉いもち発病株率は0.1%（前年0.2%）、発病地点率は1.3%（前年2.7%）でいずれもやや低かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7月27日発行の防除対策情報第9号を参照して防除する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 紋枯病	—	やや少ない（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ前年並と予報されている（ /+）。

イ、7月26日に各地域振興局が行った水稻定点調査によると、あきたこまちの茎数は482本/m²（前年比97%）でやや少なかった（ /-）。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における発病株率は0.9%（前年1.6%）、発病地点率は7.5%（前年13.8%）で、いずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ニカメイガ (2回発生地帯の第2世代)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における第1世代の食害株率は0.64%（前年0.04%）、心枯茎率は0.035%（前年0.003%）でいずれも高く、食害地点率は2.5%（前年0.8%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除を必要とするほ場は少ないと見込まれるが、防除する場合は次のいずれかの方法で行う。

- ① エルサン粉剤3DL、エルサン乳剤、スミチオン粉剤3DL、スミチオン乳剤、パダン粉剤DL、パダンSG水溶剤は、8月上～中旬（発蛾最盛日7～10日後）に散布する。
- ② パダン粒剤4は、8月上旬（発蛾最盛日5～6日後）に散布する。

イ、エルサン剤は、散布後少なくとも7日間は落水、かけ流ししない。

ウ、パダン粒剤4は湛水状態で田面に均一散布し、散布後4～5日間は入水しない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流ししない。なお、漏水田では使用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ) (第2世代成虫)	やや早い (前年より早い) やや早い (前年より早い)	多い (前年より多い) 多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(－/+)。

イ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における畦畔でのアカスジカスミカメ(以下アカスジ)のすくい取り数は3.5頭(平年1.8頭)で多く、発生地点率は28.8%(平年17.1%)で高かった。アカヒゲホソミドリカスミカメ(以下アカヒゲ)のすくい取り数は4.4頭(平年1.7頭)で多く、発生地点率は40.0%(平年27.1%)で高かった(/+)。

水田内でのアカスジのすくい取り数は0.9頭(平年0.3頭)で多く、発生地点率は15.0%(平年8.0%)で高かった。アカヒゲのすくい取り頭数は0.23頭(平年0.16頭)でやや多く、発生地点率は16.3%(平年8.6%)で高かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、高温多照の影響で出穂が早く進んでいるので、出穂期(ほ場全体の40～50%が出穂した日)の把握に努め、出穂期10日後頃にアルバリン剤/スタークル剤を畦畔を含めたほ場全体に散布する。

イ、上記の散布当日から7日後までに畦畔や農道の草刈りを行う。

ウ、出穂したノビエやホタルイ類などが見られるほ場やイネ科雑草が主体の牧草地、休耕田などに隣接しているほ場では、出穂期10日後頃の防除に加えて、同24日後頃にもエクシード剤又はキラップ剤で防除する。

5. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
コブノメイガ	－	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査において被害は確認されなかった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
セジロウンカ	－	やや少ない	やや少ない	7月4半旬まで成虫の飛来は確認されていない。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
トビイロウンカ	－	平年並	平年並	7月4半旬まで飛来は確認されていない。また、7月4～5半旬の抽出ほ場調査でも発生は確認されなかった。

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ヒメトビウンカ	—	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査におけるすくい取り数は平年並であった。斑点米カメムシ類との同時防除に努める。
ツマグロヨコバイ	—	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。
フタオビコヤガ (第3世代)	—	やや少ない	やや少ない	7月4～5半旬の抽出ほ場調査における食害株率は0.2% (平年13.1%) でやや低かった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
アワヨトウ	—	—	やや少ない	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。

B 大豆

病害虫名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 紫斑病 (子実)	やや早い (—)	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (—/±)。

イ、高温多照の影響で開花が早く進んでいる (—/)。

ウ、前年収穫期の被害粒率は多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、Q o I 剤の効力低下が認められるほ場では、アミスター20フロアブルは使用しない。

イ、開花期20～30日後にニマイバー水和剤、ベルコート水和剤、ベルコートフロアブル、プランダム乳剤25、Zボルドー、Zボルドー粉剤DLのいずれかで防除する。ただし、着莢期に降雨が多い場合は、1回目防除の約10日後に追加防除を行う。

ウ、耐性菌の出現を回避するため、同系統の薬剤は連用しない。

エ、Q o I 剤の効力が維持されているほ場であっても、アミスター20フロアブルの使用は年1回に限る。

オ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期 (発 生 盛 期)	発 生 量
2. アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	やや早い (-) やや早い (-)	平年並 (前年並) やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (ジャガイモヒゲナガアブラムシ (/-)、ダイズアブラムシ (/+))。

イ、本年の播種盛期 (各地域振興局調べ) は6月13日 (平年6月11日) で平年並だったが、生育が早まっているため、開花期が早いと見込まれる (-/)。

ウ、秋田市予察ほにおける7月4半旬の発生株率はジャガイモヒゲナガアブラムシ6.7% (平年0.5%) で高く (/+)、ダイズアブラムシ3.3% (平年1.7%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多く見られる場合は、アグロスリン乳剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	-	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、前年の収穫期の被害粒率から越冬量は平年並と推定される (/±)。

ウ、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける7月の総誘殺数は25頭 (平年8.9頭) で多い (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、アグロスリン乳剤やパーマチオン水和剤などでマメシクイガとの同時防除に努める。

イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ウコンノメイガ	-	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、7月4～5半旬の巡回調査における叩き出し成虫数は0.6頭 (平年0.8頭) で平年並、茎当たり卵塊数0.02個 (平年0.06個)、茎当たり葉巻数0.02個 (平年0.08個) でいずれもやや少なかった。 (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害は生育が旺盛なほ場で多い傾向にあるので、よくほ場を観察する。

イ、7月6半旬にはほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上ある場合は、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. フタスジヒメハムシ	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。
 イ、前年の収穫期の被害粒率から越冬量はやや少ないと推定される (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、アグロスリン乳剤やトレボン乳剤などでマメシクイガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. マメシクイガ	平年並 (前年並)	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア、成虫の羽化は日長に影響されるので、発生時期の変動は小さい (± /)。
 イ、前年収穫期の被害粒率から越冬量は多いと推定される (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、連作により発生密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。

- ① アグロスリン乳剤、アディオオン乳剤、パーマチオン水和剤は、8月下旬～9月上旬に1回散布する。
 ② トレボン剤、プレバソフフロアブル5などは9月上旬に1～2回散布する。

- イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ダイズサヤタマバエ	—	やや多い (-)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
 イ、7月中旬のえだまめ巡回調査における被害莢率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、開花日10日後頃にアルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤などで防除する。
 イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. 食葉性鱗翅目幼虫	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
 イ、7月中旬のえだまめ巡回調査における発生茎率は0% (平年1.1%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニック

スフロアブルのいずれかで防除する。

イ、老齢期になると薬剤の効果が劣るので、若齢期に防除する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒斑病・葉枯病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は1.3%（平年5.1%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、肥料切れや生育後期の草勢が弱くなることにより発生を助長する。

イ、害虫の食害痕やべと病及びさび病の病斑に二次感染するが多い。

ウ、両病害は病徴観察による識別が困難なため、両方に効果があるアミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルなどに展着剤を加用して散布する。なお、使用にあたっては、収穫前日数に留意する。また、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔は2週間以上確保する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. アザミウマ類 （ネギアザミウマ）	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は31.8%（平年22.9%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アドマイヤー顆粒水和剤、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、グレーシア乳剤、スピノエース顆粒水和剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブルなどを茎葉散布するか、ダントツ粒剤などを株元散布する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ネギハモグリバエ	—	やや少ない（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0.6%（平年14.5%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤、グレーシア乳剤、ダイアジノン乳剤40、ディアナSC、ファインセーブフロアブル、リーフガード顆粒水和剤などを茎葉

散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統(B系統)の発生が確認されている場合は、防除を徹底する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
シロイチモジヨトウ	—	前年並	前年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

D ねぎ (秋冬どり)

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒斑病・葉枯病	—	やや多い(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ前年並と予報されている(/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は1.3%(前年1.0%)で前年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ(夏どり)に準じる。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	前年並(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ前年並と予報されている(/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は11.7%(前年15.4%)でやや低かった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ(夏どり)に準じる。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ネギハモグリバエ	—	やや少ない(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ前年並と予報されている(/±)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は0.0%(前年12.1%)で低かった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ねぎ(夏どり)に準じる。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
シロイチモジヨトウ	—	前年並	前年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

E きゅうり

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ベと病	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は18.5%（平年15.5%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、草勢が弱まると発病しやすくなるので、草勢の維持に努める。

イ、風雨などにより損傷した茎葉は速やかに整理し、発病前に予防剤を散布する。

ウ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゾーベックエニベル、ベトファイター顆粒水和剤、ホライズンドライフロアブルなど治療効果のある薬剤を散布する。

エ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用は避ける。

オ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

カ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. うどんこ病	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0.2%（平年0.5%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、E B I 剤（サブロール乳剤など）、ポリオキシシンAL水和剤、ポリベリン水和剤、パルミノなど、治療効果のある薬剤を葉の表裏によく付着するように散布する。

イ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用は避ける。

ウ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 褐斑病	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は3.4%（平年1.2%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、発病後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル、ジマンダイセン水和剤、セイビアーフロアブル20、ダコニール1000などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤など、治療効果のある薬剤を散布する。

ウ、ベンゾイミダゾール系剤、SDHI剤、QoI剤では耐性菌が確認されているので、防除しても効果が低い場合は異なる系統の薬剤を選択する。また、同一系統薬剤は連用しない。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 斑点細菌病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は8.2%（平年6.8%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉や茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、銅剤又はその混合剤で防除する。

ウ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 炭疽病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4半旬の巡回調査における発病株率は0.5%（平年2.0%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉や茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、予防散布に努めるとともに、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤など、治療効果のある薬剤を散布する。

ウ、葉害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用は避ける。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

オ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6. アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における発生株率は5.0% (平年9.1%) で低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、定期的に薬剤を散布する。

イ、抵抗性の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
7. ワタヘリクロノメイガ	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月4半旬の巡回調査における食害株率は1.5% (平年0.6%) でやや高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、初期被害を早期に確認し、若齢幼虫期に防除する。

イ、発生が多い場合は、アフーム乳剤、コテツフロアブルなどで防除する。

8. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
灰色かび病	—	前年並	前年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。
コナジラミ類 (オンシツコナジラミ)	—	前年並	前年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。
アザミウマ類	—	前年より 多い	やや多い	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

F トマト

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 灰色かび病	—	やや少ない(前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/-)。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は1.8% (平年1.1%)、発病度は0.3 (平年0.3) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からゲッター水和剤、ベルコート水溶剤、ロブラール水和剤などで予防散布に努める。
 エ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。特にベンゾイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤は耐性菌が確認されているので薬剤の選択に留意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 葉かび病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
 イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は6.2%（平年7.9%）、発病度は1.6（平年2.0）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
 イ、発病部位は早めに除去し、ほ場で処分する。
 ウ、発病前からゲッター水和剤、ダコニール1000、ベルコート水和剤などで予防散布に努める。
 エ、耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ヒラズハナアザミウマ	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
 イ、北秋田市予察ほにおける7月4～5半旬の青色粘着板への誘殺数は845頭（平年266頭）で多かった（ /+）。
 ウ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
 イ、スピノエース顆粒水和剤、バストガード水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤などを花房に付着するよう丁寧に散布する。ただし、抵抗性の出現を回避するため同一系統薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. オオタバコガ	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。
 イ、北秋田市予察ほにおける7月1～5半旬のフェロモントラップへの誘殺数は0頭（平年0.7頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、食害痕を発見したら、幼虫が近くに潜んでいるので、注意深く観察し、捕殺する。
 イ、初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (ワタアブラムシ) (モモアカアブラムシ)	—	平年並	平年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

G えだまめ

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ベと病	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における発生茎率は0% (平年0.2%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、汚損莢の防除において、1回散布では開花日から開花3日後散布の効果が高い。

イ、フェスティバルC水和剤、ランマンフロアブル、ライメイフロアブル、レーバスフロアブルなどで防除する。

ウ、薬剤は葉裏によく付着するように散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. ツメクサガ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月中旬の巡回調査における発生茎率は0% (平年1.1%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、幼虫の発生初期 (若齢期) にトレボン乳剤、フェニックスフロアブルなどで防除する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ダイズサヤタマバエ	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、7月中旬の巡回調査における被害莢率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、中晩生品種では開花日 (ほ場全体の50%程度が開花した日) 10日後頃に1回、晩生品種では開花日7日後頃および14日後頃の2回、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤又はアルバリン粉剤DL/スタークル粉剤DLで防除する。

イ、中晩生品種又は晩生品種でスミチオン乳剤、トレボン乳剤、ダイアジノン粒剤5を選択する場

合は、開花日頃～開花日7日後頃に2回使用する。
 ウ、粉剤DL、乳剤、顆粒水溶剤は、莢によく付着するように散布する。粒剤を使用する場合は、ほ場全体に均一に散布する。

H りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は1.4%（平年1.9%）でやや低く、発病地点率は68.2%（平年70.5%）で平年並だった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。
- イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤、ロブラール水和剤、ユニックス顆粒水和剤47のいずれかを主剤に加用して散布する。なお、これらの薬剤は年1回の使用とする。ただし、ポリオキシシAL水和剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。
- ウ、QoI剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病地点率は18.2%（平年16.4%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病葉、発病果実は見つけ次第摘み取り、焼却する。
- イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- ウ、発生園では、QoI剤の使用を中止し、保護殺菌剤を10日間隔で散布する。
- エ、未発生園では、QoI剤の使用が可能であるが、必ず作用機作の異なる保護殺菌剤（ベルコート水和剤、有機銅剤など）を加用する。また、耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	平年並（—）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、りんごの生育は概ね平年並に推移している（±/ ）。
- イ、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- ウ、7月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。
- イ、ニセアカシアは伝染源となるので、園地の近くにある木は伐採する。
- ウ、被害果は見つけ次第摘み取り、土中に埋める。
- エ、Q o I 剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4. 輪紋病	—	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。
- イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。
- ウ、Q o I 剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 褐斑病	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.3% (平年0.0%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。
- イ、多発が予想される場合は、8月上旬にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を主剤に加用して散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌の出現を回避するため、年1~2回の使用とするが、両剤の効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47を主剤に加用して散布する。
- ウ、Q o I 剤は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並 (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、県内7か所の防除適期決定ほにおける6月1半旬~7月4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は352頭 (平年393頭) で平年並だった (/±)。
- イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.0% (平年0.0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、被害果は速やかに摘み取り、6日以上水漬けする。
- イ、成虫の飛来や産卵が多い園地では直ちに防除する。
- ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	—	やや多い（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たりの発生頭数は0.5頭（平年0.4頭）で平年並、発生地点率は59.1%（平年43.6%）でやや高かった。（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、1葉平均成幼虫数が3頭に達した樹が全体の10%になった頃に殺ダニ剤を散布する。

イ、コロマイト乳剤は薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるので、高温時には使用しない。

また、本剤とストライド顆粒水和剤又はスミチオン水和剤40との混用でも、薬害（葉の黄変、葉裏の褐変）を発生させるおそれがあるので使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点在同一の剤は年1回までの使用とする。

エ、銅剤（銅を含む製剤）を使用した園地では、ダニオーテフロアブルの防除効果を低下させるおそれがあるので、注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. リンゴハダニ	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.02頭（平年0.01頭）で多く、発生地点率は27.3%（平年4.5%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、「7. ナミハダニ」の項を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 (クキカメムシ、チャバネカメムシ)	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.4%（平年0.1%）、被害地点率は31.8%（平年15.9%）でいずれも高かった（ /+）。

ウ、県内7か所の防除適期決定ほにおける5月1半旬～7月4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は563頭（平年639頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況を良く観察する。新成虫の加害は、山間部や林地に隣接する園地で多いので特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤又は合成ピレスロイド剤で防除する。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
10. キンモンホソガ (第4世代幼虫)	早い(前年並)	やや多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、予察ほにおける第2世代成虫のフェロモントラップへの最盛誘殺半旬は、果樹試験場(横手市)が7月4半旬(平年7月5半旬)でやや早く、かつの果樹センター(鹿角市)が7月4半旬(平年7月6半旬)で早かった(-/)。

イ、7月上～中旬の平均気温が高かったので、キンモンホソガの発育は早まっていると推察される(-/)。

ウ、7月中旬の巡回調査における被害葉率は0.2%(平年0.2%)で平年並、被害地点率は27.3%(平年19.8%)でやや高かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。

イ、防除適期は、県北部が8月3～4半旬、県中央部・県南部が8月2～3半旬と見込まれる。

ウ、防除はバリアード顆粒水和剤又はモスピラン顆粒水溶剤などのネオニコチノイド剤を使用する。

11. その他病虫害の発生予報と防除上注意すべき事項

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類 (リンゴコクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

I なし(日本なし)

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒星病	—	平年並(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている(/±)。

イ、7月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.05%(平年0.14%)でやや低く、発病果率は0.20%(平年0.22%)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は速やかに切除し、適切に処分する。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を7日とする。

ウ、スピードスプレーヤーで防除する場合は、1列おきではなく全列を走行し、丁寧に散布する。薬液のかかりにくい部分には、当日中に手がけで補正散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における新梢の発病葉率は0.4%（平年6.0%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲で発病が多い。

イ、徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

ウ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合又は発病の見られる園地では散布間隔を7日とする。

エ、多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤を主剤に加用するか、ポリキャプタン水和剤を散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシシ剤の使用は年間3回以内とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 輪紋病	—	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は、147頭（平年178頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害（葉裏に黒色斑）を発生させるおそれがあるので、これらの品種にかからないようにする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ナミハダニ	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.03頭（平年0.02頭）でやや多く、発生地点率は27.3%（平年12.7%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では、直ちに殺ダニ剤を散布する。ただし、コロマイト水和剤は薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるので、高温・乾燥時には使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.40%（平年0.03%）で高かった（ /+）。

ウ、県内4か所の防除適期決定ほにおける7月1～4半月のチャバネアオカメムシフェロモントラップのカメムシ類の総誘殺数は75頭（平年60頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地で多いので特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤又は合成ピレスロイド剤で防除する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であることから、総使用回数に注意する。

7. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
リンゴハダニ	—	平年並	平年並	ナミハダニとの同時防除が可能である。
ハマキムシ類 (リンゴコクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

J ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. べと病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）、発病房率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

ウ、横手市予察ほ（品種：巨峰）における初発は、7月8日（平年7月25日）で早く、7月下旬の発病葉率は12.4%（平年3.3%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、袋かけ以降の散布薬剤は、コサイド3000、ホライズンドライフロアブル、ボルドー剤のいずれかとする。なお、使用する際は収穫前日数を十分に考慮する。

イ、ホライズンドライフロアブルの使用は、耐性菌の出現を回避するため年間1回とし、かつQoI剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 灰色かび病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における新梢葉の発病葉率は、キャンベル・アーリーが0.1%（平年0.2%）で平年並、巨峰は0.1%（平年0.3%）でやや低かった。発病果房率は、キャンベル・アーリーが0%（平年0.3%）、巨峰は0%（平年0.2%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉や発病果房は速やかに摘み取り、焼却するなど適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 晩腐病	やや早い（-）	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、ぶどうの成熟期が平年より早いと見込まれる（-/ ）。

ウ、6月上旬の巡回調査における発病果房率はキャンベル・アーリーが0%（平年0%）、巨峰が0%（平年0.1%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した果粒は速やかに摘み取り、焼却するなど適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. チャノキイロアザミウマ	—	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における被害果房率はキャンベル・アーリーが0%（平年0.0%）、巨峰が0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。
- ウ、県内2か所の防除適期決定ほにおける7月1～3半旬の黄色粘着板への総誘殺数は28頭（平年29.0頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、例年被害の多い園地では袋かけ後もエクシレルSE又は合成ピレスロイド剤で防除する。なお、使用する際は収穫前日数を十分に考慮する。
- イ、合成ピレスロイド剤の使用は年間1～2回にとどめる。

IV. 気象予報

令和3年7月29日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（7月31日～8月30日）

(1) 予報のポイント

- ・ 暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	20%	70%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	30%	30%	40%

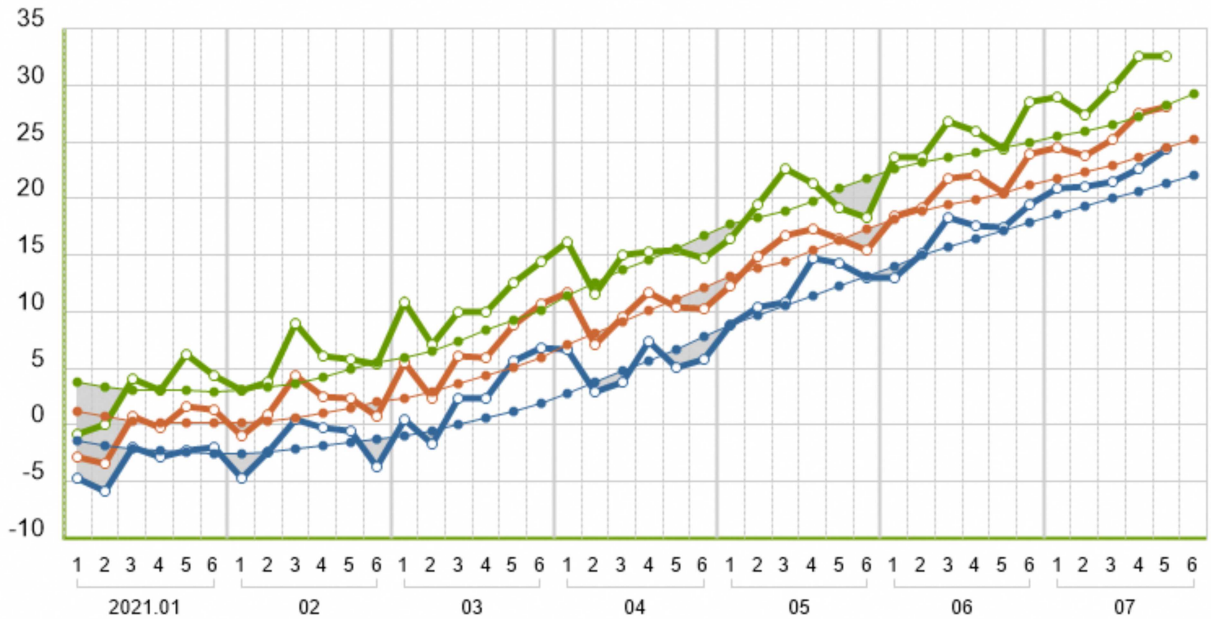
(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

	低い	平年並	高い
7/31～8/6（1週目）	10%	10%	80%
8/7～8/13（2週目）	10%	20%	70%
8/14～8/27（3～4週目）	10%	30%	60%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬 秋田県農業気象システムより)

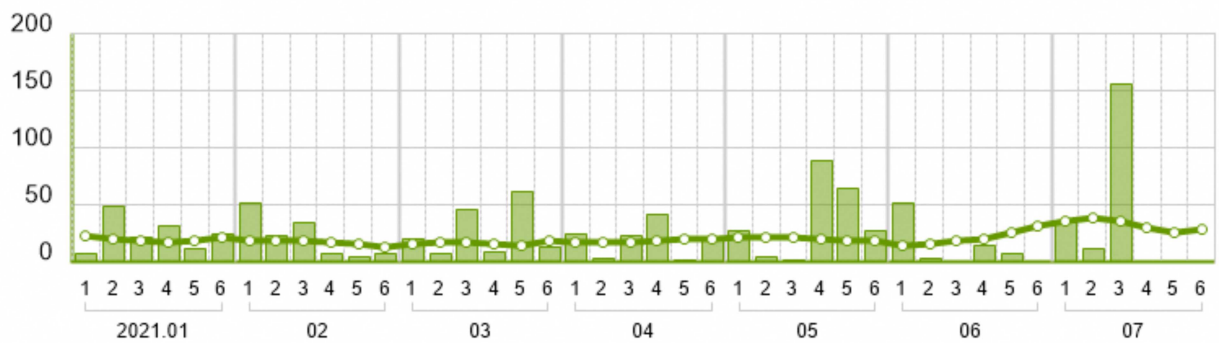
気温℃

○ 平均気温 ○ 最高気温 ○ 最低気温
 ○ 平均気温平年値 ○ 最高気温平年値 ○ 最低気温平年値



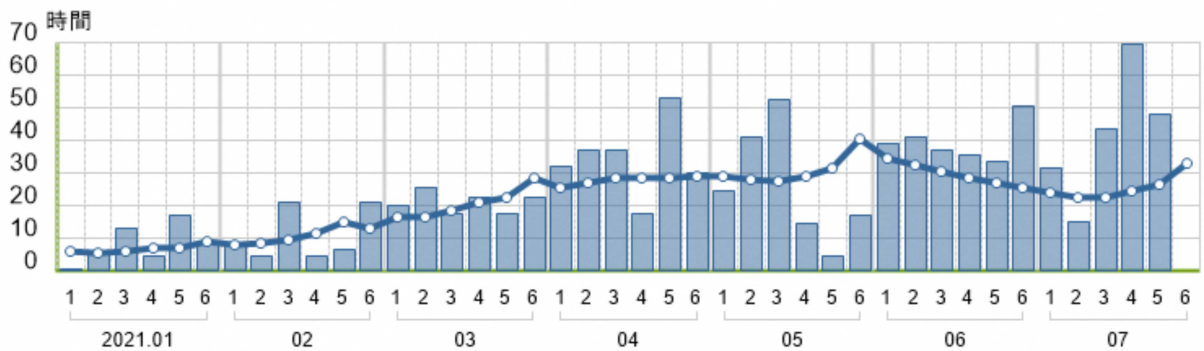
降水量ミリ

■ 実況値
 ○ 平年値



日照時間

■ 実況値
 ○ 平年値



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い	平年並					やや遅い	遅い				

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

	平年値 ↓					
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半月のとり方

ここで扱われる「半月」とは暦日半月のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半月は1日から5日まで、2半月は6日から10日までであり、以降6半月まで5日ごとに該当する期間を指します。

**令和3年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～**

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。

- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に十分周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布時の装備と体調は万全にする。

- 農薬の取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。